

Oracle® Fusion Middleware

Aribaアダプタの使用

リリース14c (14.1.2)

G24042-01

2024年8月

Oracle Fusion Middleware Aribaアダプタの使用, リリース14c (14.1.2)

G24042-01

Copyright © 2020, 2024 Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

原著者: Sunil Kumar

原協作者: Ranga Reddy Mekala, Shubham Baburao Shirure, Arpit Gupta, Ramya S, Ashok Kumar Reddy Nekkanti, and K Rajendra Prasad

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

このソフトウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

目次	iii
はじめに	v
1. Aribaアダプタの概要	1-1
クラウド環境とオンプレミス環境でのこのコンポーネントの使用方法的の違い	1-1
Aribaアダプタについて	1-1
Aribaアダプタのユースケース	1-2
前提条件	1-2
Aribaの統合方法について	1-3
現在サポートされている統合方法	1-3
Aribaでの統合タスクの有効化	1-3
SOAPアダプタでAribaを呼び出すためのWSDLファイルの生成	1-5
クラウド・アダプタのインストール	1-6
インストール後の構成タスクの実行	1-6
認証資格証明の取得	1-6
サポートされていない機能	1-7
2. Aribaアダプタ接続の作成	2-1
アダプタ構成ウィザードを使用した統合の設計	2-1
ランタイム時のアプリケーションの監視	2-4
アーティファクトの作成	2-4
3. SOAコンポジット・アプリケーションの設計	3-1
SOAコンポジット・アプリケーションの作成	3-1
SOAコンポジット・アプリケーションへの参照としてのアダプタの追加	3-2
SOAコンポジット・アプリケーションの設計の完了	3-2
4. Oracle Service Busビジネス・サービスの設計	4-1
Oracle Service Busビジネス・サービスの作成	4-1
ビジネス・サービスへの参照としてのアダプタの追加	4-1
Oracle Service Busビジネス・サービスの設計の完了	4-2

5. Aribaアダプタのプロパティの構成.....	5-1
基本情報プロパティの構成	5-1
「基本情報」 ページで実行できる操作	5-1
「基本情報」 ページに表示される内容	5-2
Oracle Cloudアダプタ接続とCSFキー・プロパティの構成.....	5-2
Oracle Cloudアダプタの「接続」 ページで実行できる操作	5-2
Oracle Cloudアダプタの「接続」 ページに表示される内容	5-3
Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」 ページで実行できる操作	5-3
Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」 ページに表示される内容.....	5-3
Aribaアダプタ呼出しの操作プロパティの構成.....	5-4
Aribaアダプタ呼出しの「操作」 ページで実行できる操作.....	5-4
Aribaアダプタ呼出しの「操作」 ページに表示される内容.....	5-4
「サマリー」 ページでの構成値のレビュー.....	5-5
「サマリー」 ページで実行できる操作	5-5
「サマリー」 ページに表示される内容	5-6
6. アプリケーションの管理.....	6-1
Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlでの アプリケーションの 管理.....	6-1
Oracle Service BusコンソールからのOracle Service Busプロジェクトのテスト	6-1
7. トラブルシューティング.....	7-1

はじめに

『Ariba アダプタの使用』では、SOAコンポジット・アプリケーションおよびOracle Service Bus ビジネス・サービスでAribaアダプタを使用する方法を説明します。

この項は次のトピックで構成されています。

- [対象者](#)
- [関連リソース](#)
- [表記規則](#)

対象者

『Ariba アダプタの使用』は、Aribaアダプタを使用するアプリケーションを作成、デプロイ、テストおよびモニターするユーザーを対象としています。

関連リソース

詳細は、次のOracleリソースを参照してください。

- *Oracle SOA Suite* でのSOAアプリケーションの開発
- *Oracle SOA Suite*および*Oracle Business Process Management Suite*の管理
- *Oracle Service Bus*の管理
- テクノロジ・アダプタの理解

表記規則

このドキュメントでは次のテキスト表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	太字タイプは、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中または用語集で定義されている用語を示します。
イタリック	イタリック・タイプは、ブック・タイトル、強調、またはユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅 フォント	固定幅フォント・タイプは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

1.

Aribaアダプタの概要

この章は次の項で構成されています。

- [クラウド環境とオンプレミス環境でのこのコンポーネントの使用方法的の違い](#)
- [Aribaアダプタについて](#)
- [Aribaアダプタのユースケース](#)
- [前提条件](#)
- [Aribaの統合方法について](#)
- [現在サポートされている統合方法](#)
- [Aribaでの統合タスクの有効化](#)
- [SOAPアダプタでAribaを呼び出すためのWSDLファイルの生成](#)
- [クラウド・アダプタのインストール](#)
- [インストール後の構成タスクの実行](#)
- [認証資格証明の取得](#)
- [サポートされていない機能](#)

クラウド環境とオンプレミス環境でのこのコンポーネントの使用方法的の違い

このコンポーネントの使用方法的についてクラウド環境とオンプレミス環境とで違いがあり、このガイドの説明内容に影響する場合があります。

違いの詳細は、[クラウド環境とオンプレミス環境の違い](#) [Premises Environments](#) および [Oracle SOA Cloud Service](#) の既知の問題に関する項を参照してください。

Aribaアダプタについて

Aribaは、B2B調達プロセスをAribaソリューションに統合して自動化するSaaS ベースのアプリケーションです。Aribaアダプタを使用して、バイヤーとサプライヤの間でB2Bトランザクションを実行し、ERPシステムとAriba調達ソリューションP2PまたはP2Oの間でマスター・データとトランザクション・データの統合をインポートおよびエクスポートできます。

Aribaは、単一のプラットフォームでバイヤーとサプライヤが相互に検索し合い、連携してビジネスを実行できるクラウド・ベースのB2Bマーケットプレイスです。Aribaは主に、それぞれがビジネスを実行できる、バイヤーおよびサプライヤ・ネットワーク・モジュールとして機能します。バイヤーはサプライヤの検索、商品やサービスの調達、支出の追跡を行うこ

とができます。サプライヤーは独自のカタログ、購買、入札、および請求書を管理できます。

Aribaは、現在急増している、パートナ、リソース・ベンダーおよび顧客と緊密に連携する必要のあるビジネスや製造会社に最適なソリューションです。これには、情報、リアルタイム・ステータス・レポートおよびドキュメントの共有に加え、調達、Eコマース、電子請求処理、その他の操作などの重要なビジネス・プロセスでのコラボレーションが必要になります。SAP Aribaは、最新ビジネス向けのマーケットプレイスで、数百万のバイヤーと販売元の間のシンプルかつインテリジェントな取引市場を構築します。

Aribaアダプタを使用すると、AribaバイヤーSaaSアプリケーションとの統合を作成できます。このクラウド・アダプタ・フレームワークは、Aribaバイヤー・システムにのみ安全に接続し、データを統合します。

Oracle SOA Middleware向けAribaアダプタは、ERPシステムとAribaの間のラウンドトリップ通信の実装に使用されます。

Aribaアダプタを使用すると、Ariba調達ソリューションをERPシステムと統合でき、管理者は任意のERPシステムから調達システムへのマスター・データのインポートとトランザクション・データのエクスポートをシームレスに実行できます。

Aribaアダプタのユースケース

このユースケースでは、製造会社がAribaアダプタを使用してサプライ・チェーン管理の単純化、受注の複雑さの軽減、供給業務の効率化をどのように実現したかを説明します。

- 顧客は製造会社が製造した原料をオンラインで購入します。
- Aribaアダプタにより、購入リクエストが製造会社に送信されます。
- 製造会社はリクエストされた原料を見つけて、出荷用に準備します。
- 製造会社はAribaアダプタを使用して、購入品目を出荷したことを顧客に通知し、追跡情報を提供します。
- Aribaアダプタにより、顧客が注文した製品に関するインベントリ情報が更新されます。
- アダプタでサポートされるリアルタイム統合パターンはWebサービス・ベースまたはITKベースのいずれかにすることができます。
- アダプタは、製造会社で使用されているあらゆる種類のソースと調達フローを処理し、AribaとERPシステムとの間でマスター・データとトランザクション・データをインポートおよびエクスポートできます。

前提条件

Aribaアダプタを使用するには:

- SOAでCSFキーを作成するためにAribaユーザー・アカウントと資格証明が必要です。
- このセキュリティ・キーに基づいて、SOAからAribaアプリケーションを呼び出すことができます。

ノート: システム管理者は、SOAでCSFキーを作成するための権限と資格証明を提供する必要があります。

アプリケーションのサポート

1-2 Aribaアダプタの概要

- Aribaアダプタは、Ariba Spend Managementバージョン15と互換します。
- このアダプタは、2015年4月以降に開始された様々なモジュールのクラウド・リリースの全バージョンと互換します。サポートされるモジュールは次のとおりです。
 - 調達-支払
 - Ariba Sourcing

Aribaの統合方法について

Aribaアプリケーションは、3種類のデータ統合方法をサポートします。

- ファイルベースの統合(ITK)
- Webサービス・ベースの統合
- Ariba Network

ファイルベースの統合(ITK)

Ariba ITK (Integration Tool Kit)を使用すると、バイヤーはAribaを任意のERPシステムと統合し、CSVファイルのアップロードおよびダウンロードによってマスター・データとトランザクション・データをやりとりできます。

Webサービス・ベースの統合

これはAribaに直接接続する方法です。WSDLに基づいてAPISを開発し、Aribaアプリケーションに直接接続してマスター・データとトランザクション・データをアップロードおよびダウンロードできます。Ariba SOAP WebサービスはW3C SOAPメッセージング・フレームワークを使用してHTTPまたはHTTPS経由でメッセージを交換します。

Ariba Integration Managerは、Ariba SOAP Webサービス操作の記述をXMLベースの言語であるWeb Services Description Language (WSDL)で生成します。一般的に、EAIシステムの開発者はAriba SOAP Webサービスと通信するための統合を作成するときにWSDLの記述を使用します。

現在サポートされている統合方法

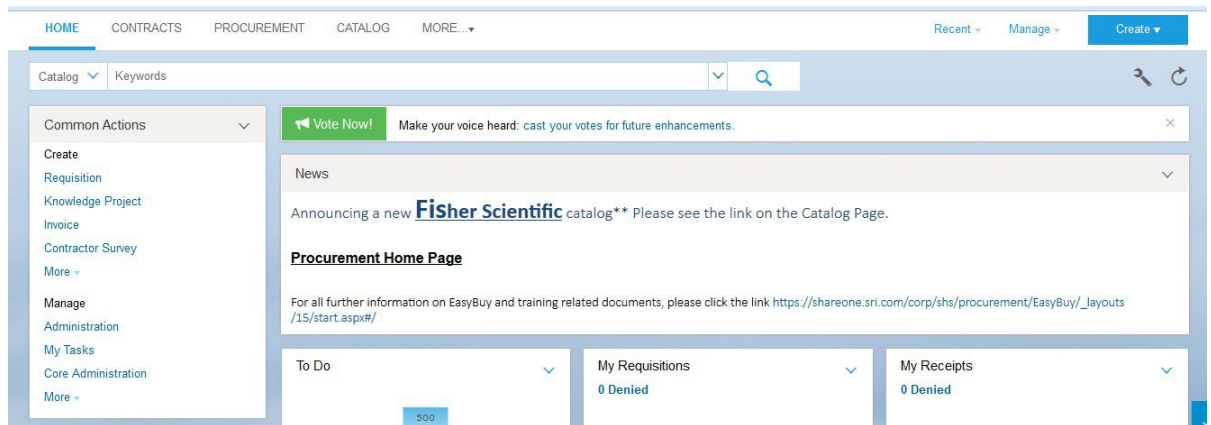
現在、アダプタはAribaアプリケーションとERPシステムとのアウトバウンドのWebサービス・データ統合のみをサポートしています。現在、Ariba Networkはサポートされていません。

Aribaでの統合タスクの有効化

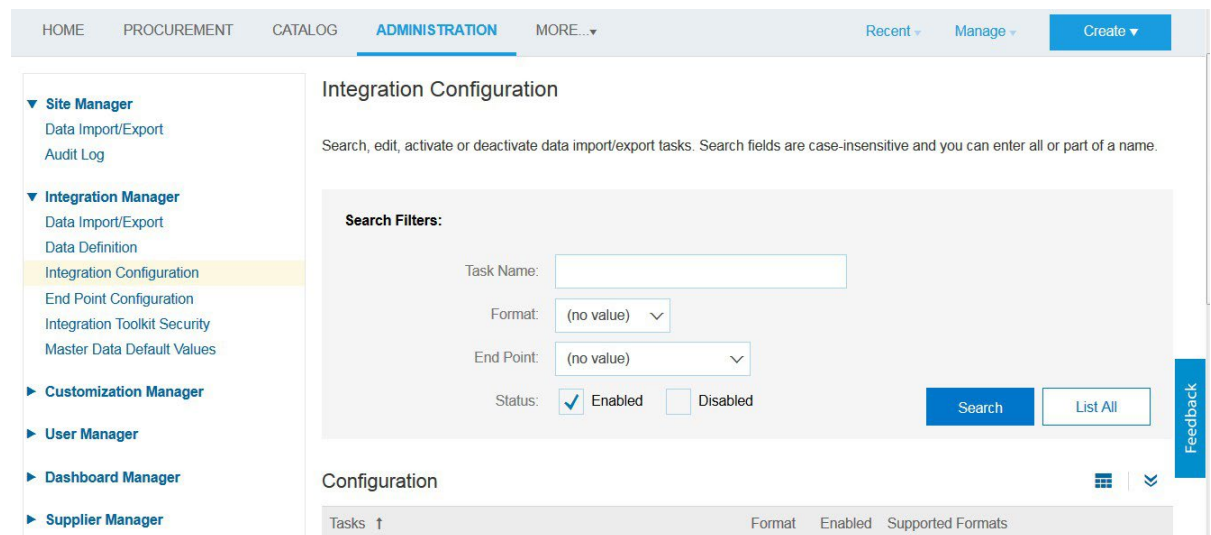
SOAで操作を実行する前に、Aribaで統合タスクを有効にする必要があります。

ノート: 操作(イベント)がAribaアプリケーションで有効でない場合、そのイベント(操作)のデータはAribaアプリケーションに送信されません。

1. Ariba Spend Managementダッシュボードで、「**Manage**」、「**Administration**」の順にクリックします。



2. 左側のメニューで、「**Integration Manager**」をクリックし、「**Integration Configuration**」をクリックします。



3. 有効にするタスクを検索します。「**List All**」を選択するか、検索基準を入力して「**Search**」をクリックします。

4. タスクに対して、「**Action**」をクリックし、「**Edit**」をクリックします。図に示されているように、「**Edit data import/export**」タスク・ペインが表示されます。

5. 「**Status**」フィールドで、「**Enabled**」を選択します。

6. 「**End point**」フィールドのドロップダウン・メニューを使用してエンド・ポイントを選択します。
7. アウトバウンド・エンド・ポイントを使用するサービスを構成している場合は、EAIシステムの対応するエンドポイントのURLを指定します。
8. 「**Save**」をクリックします。

SOAPアダプタでAribaを呼び出すためのWSDLファイルの生成

AribaでWSDLを生成するには、次の手順に従います。

1. Ariba Spend Managementダッシュボードで、「**Manage**」、「**Administration**」の順にクリックします。
2. 「**Integration Manager**」の展開矢印をクリックします。
3. 「**Integration Configuration**」を選択します。

4. WSDLファイルを生成するタスクを検索します。「List All」を選択するか、検索基準を入力して「Search」をクリックします。
5. 「Actions」をクリックし、タスクの「Edit」をクリックします。
6. 「View WSDL」リンクをクリックします。

- 上図に示されているとおりに「View WSDL」リンクをクリックすると、ブラウザでWSDLが開きます。このWSDLはローカル・システムに保存し、SOAでSOAPサービスとして公開できます。

クラウド・アダプタのインストール

クラウド・アダプタのインストール方法の詳細は、パッチに付属しているREADME.txtを参照してください。アダプタのインストールが完了したら、[「インストール後の構成タスクの実行」](#)で説明されているタスクを実行します。

ノート: サポートされるバージョンとプラットフォームについては、[サポートされているシステム構成](#)のリリース版動作保証マトリックスを参照してください。

インストール後の構成タスクの実行

クラウド・アダプタのインストール後に、インストール後の構成タスクを実行する必要があります。

インストール後の構成タスクの詳細は、Oracle Cloudアダプタ・インストール後の構成ガイドを参照してください。

認証資格証明の取得

Aribaにアクセスするには、既存のAribaユーザー・アカウントが必要です。ユーザー・アカウントは、接続や統合を作成するために必要な資格証明を指定するために必要です。

管理者ユーザーは、インバウンドとアウトバウンドのエンドポイント構成に対する新しい権限を作成して、ユーザーにセキュリティ資格証明を提供できます。

SOAとOSBで接続および統合を作成している間、エンド・ユーザーが同じ資格証明を使用できます。

1-6 Aribaアダプタの概要

サポートされていない機能

アダプタは、次の機能をサポートしていません。

- 現在、Ariba (SOA)アダプタはAriba Networkとの統合をサポートしていません。
- `jca.retry.count`、`jca.retry.backoff`、`jca.retry.interval`、および`jca.retry.maxInterval`などのアダプタのランタイム再試行構成プロパティ。
- Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlのエラー・ホスピタルでのメッセージのリカバリ。
- Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlの参照(アウトバウンド)アダプタ用の「プロパティ」タブでのプロパティの表示(サービスWSDL URLや使用されるCSFキーなど)。これらは、「サービスと参照」ページで選択する参照アダプタです。
- 拒否されたメッセージの処理
- 次のメッセージの暗号化および復号化機能は、Oracle JDeveloperの「公開されたサービス」スイムレーンまたは「外部参照」スイムレーンでクラウド・アダプタを右クリックすると使用できます。
 - 「公開されたサービス」スイムレーンのクラウド・アダプタの場合は「機密データの保護」→「リクエスト・データの暗号化」。
 - 「外部参照」スイムレーンのクラウド・アダプタの場合は「機密データの保護」→「機密データの復号化」。
- ポリシー・アタッチメント機能は、Oracle JDeveloperの「公開されたサービス」スイムレーンまたは「外部参照」スイムレーンでクラウド・アダプタを右クリックすると使用できます。

Aribaアダプタ接続の作成

この章は次のトピックで構成されています。

- [アダプタ構成ウィザードを使用した統合の設計](#)
- [ランタイム時のアプリケーションの監視](#)
- [アーティファクトの作成](#)

アダプタ構成ウィザードを使用した統合の設計

アダプタ構成ウィザードを使用して、SOAコンポジット・アプリケーションまたはOracle Service Busビジネス・サービスにAribaアダプタを含めます。

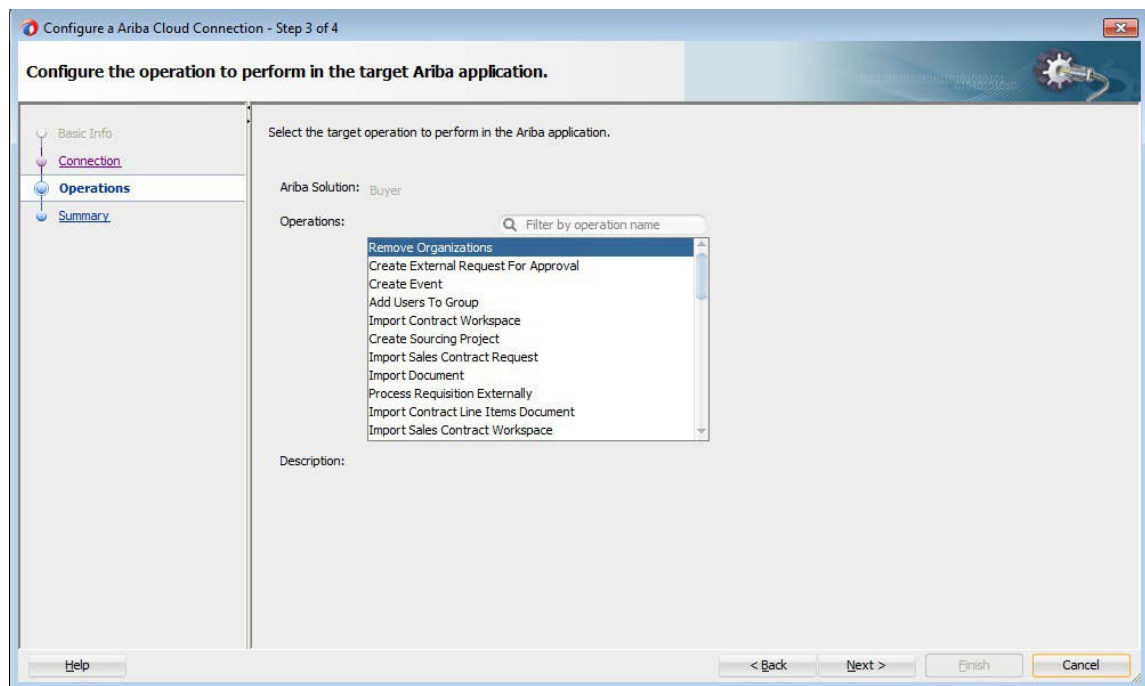
アダプタ構成ウィザードは、Aribaクラウド・アプリケーションと通信するために必要なアーティファクトを選択できる構成ページで構成されています。アダプタはアウトバウンド(ターゲット)方向に構成できます。

1. 「基本情報」ページでは、わかりやすい名前とオプションの説明の入力が求められます。

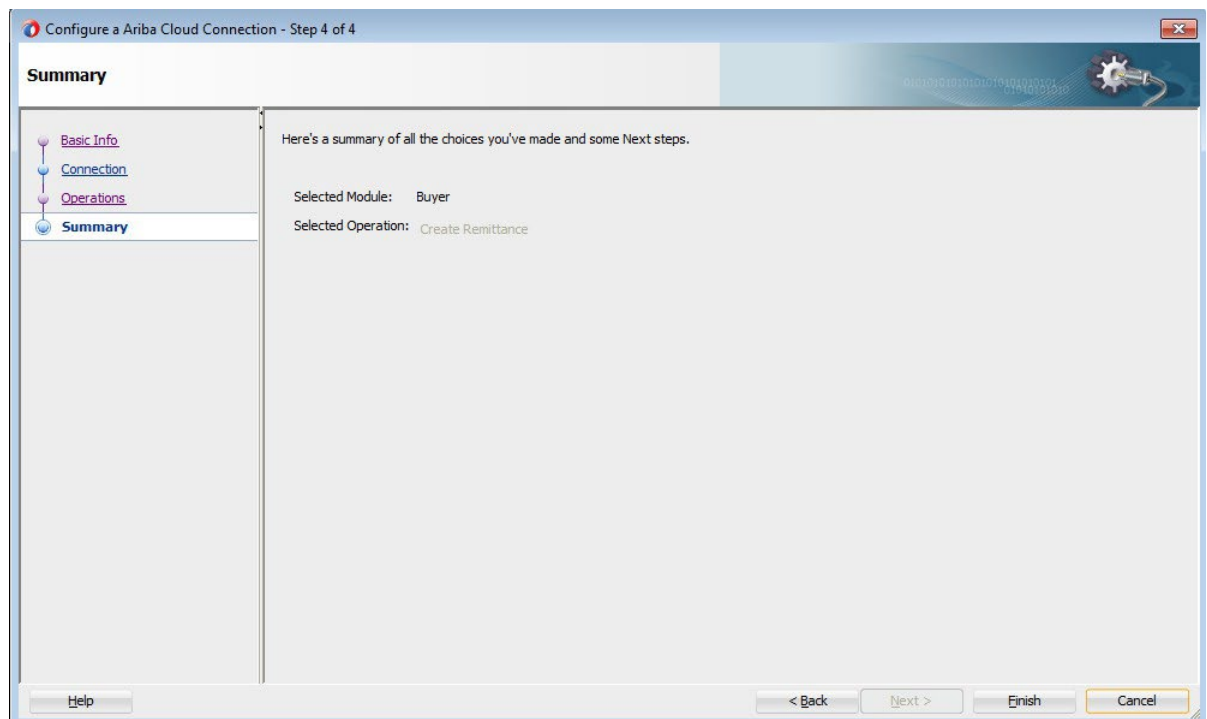
2. 「接続」ページでは、「**Ariba**ホスト名」、「アプリケーション名」、「パーティション名」および使用する「セキュリティ・ポリシー」と「認証キー」を指定できます。認証キーは、「追加」アイコンをクリックして、キー名、ユーザー名、およびパスワードを指定して作成されます。Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlでもこれらの同じ値を指定する必要があります。手順については、Oracle Cloudアダプタ・インストール後の構成ガイドを参照してください。

2-2 Aribaアダプタ接続の作成

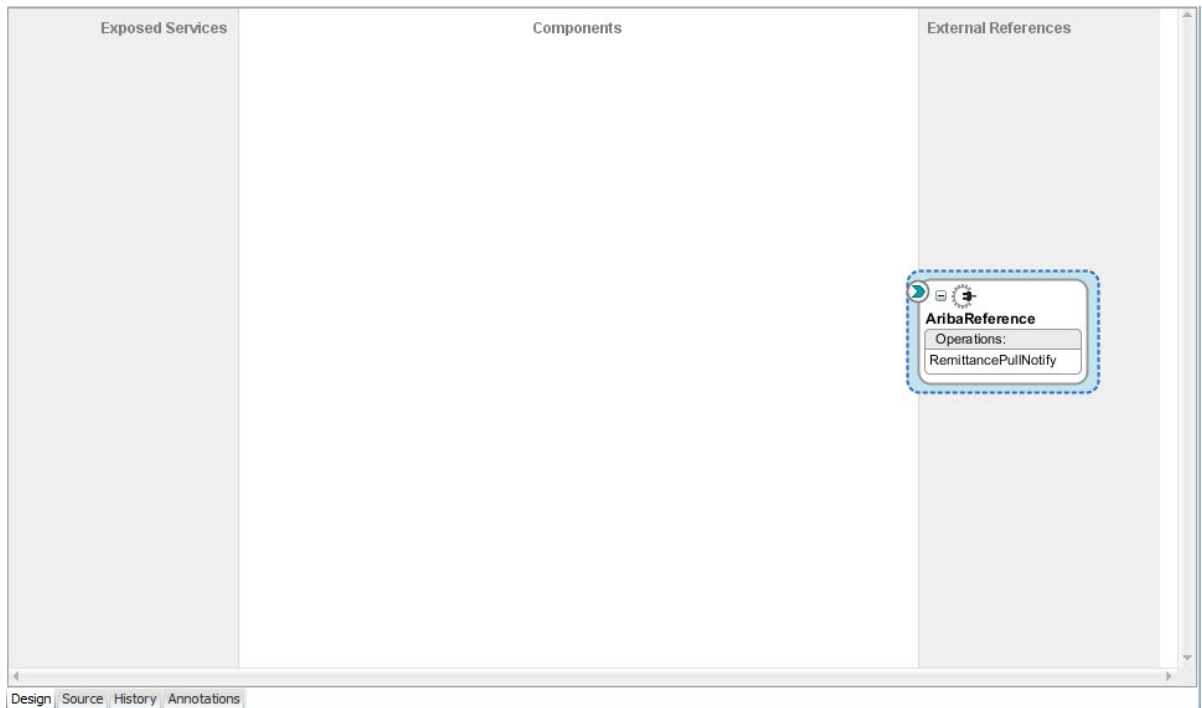
3. 「操作」 ページでは、Aribaアプリケーションで実行するターゲット操作を選択できます。



4. 「サマリー」 ページには、アウトバウンド方向で選択した内容が表示されます。



5. アダプタが JDeveloper の「外部参照」に表示されます。



ランタイム時のアプリケーションの監視

この項では、デザインタイムとランタイムでのAribaアダプタの使用について説明します。デザインタイム中に生成された情報をサービス・エンドポイントに提供するためにアダプタのランタイム部分を使用します。SOAコンポジット・アプリケーションまたはOracle Service Busビジネス・サービスをOracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlから監視できます。Oracle Service Busビジネス・サービスをOracle Service Busコンソールからテストすることもできます。

アーティファクトの作成

Oracle JDeveloperの「アプリケーション」ウィンドウで次のアーティファクトがアダプタ・インスタンスごとに作成されます。

- WSDLファイル: 標準のWSDLファイル・タイプのみサポートされます。
- JCAファイル: ランタイム時にアダプタで使用する内部実装の詳細を含みます。これには、アダプタで使用する様々な相互作用プロパティと接続プロパティが含まれます。

アプリケーションの構成が完了したら、アプリケーションをOracle JDeveloperからランタイム環境にデプロイできます。

ウィザード・ページのフィールドで指定する詳細については、[Oracle Aribaクラウド接続プロパティの構成](#)を参照してください。

SOAコンポジット・アプリケーションの設計

この項では、Aribaアダプタを使用したSOAコンポジット・アプリケーションの設計方法について説明します。

この項は次のトピックで構成されています。

- [SOAコンポジット・アプリケーションの作成](#)
- [SOAコンポジット・アプリケーションへの参照としてのアダプタの追加](#)
- [SOAコンポジット・アプリケーションの設計の完了](#)

SOAコンポジット・アプリケーションの作成

この項では、公開されたサービスまたは外部参照としてアダプタを含めるSOAコンポジット・アプリケーションを作成する方法の概要を示します。

1. Oracle JDeveloperを起動します。
2. 「ファイル」メニューから、「新規」→「アプリケーション」を選択します。
3. 「新規ギャラリー」ダイアログで、「アイテム」リストから「SOAアプリケーション」を選択し、「OK」をクリックします。SOAアプリケーションの作成ウィザードが表示されます。
4. アプリケーション名を指定し、「次へ」をクリックします。
5. プロジェクト名を指定し、「次へ」をクリックします。
6. 「BPELを使用するコンポジット」を選択し、「終了」をクリックします。

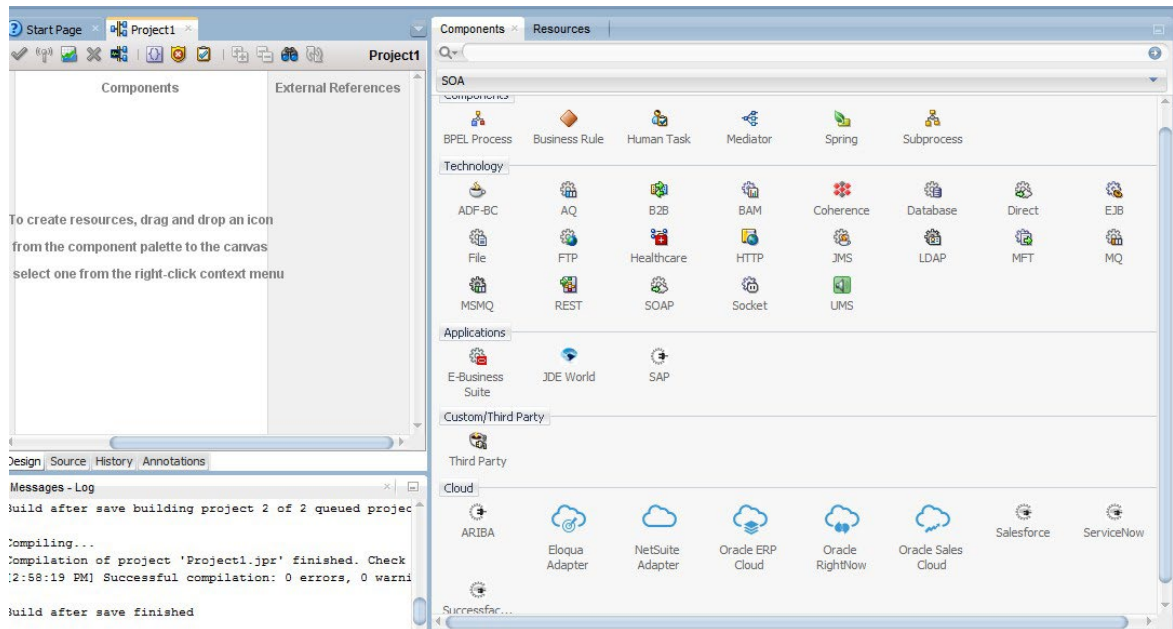
SOAコンポジット・エディタで設計するためのSOAコンポジット・アプリケーションが表示されます。

SOAコンポジット・アプリケーションへの参照としてのアダプタの追加

Oracle JDeveloperで「外部参照」スイムレーンへのアウトバウンド(ターゲット)参照として Aribaクラウド・アダプタをSOAコンポジット・アプリケーションに追加できます。

1. SOAコンポジット・アプリケーションの「コンポーネント・パレット」に移動します。
2. 「カスタム/サード・パーティ」の「クラウド」セクションに移動します。

アダプタが表示されます。



3. アウトバウンド(ターゲット)参照を作成するには、アダプタを「外部参照」スイムレーンにドラッグし、アダプタを構成するウィザード・ページについて説明している次の項を参照してください。
 - [基本情報プロパティの構成](#)
 - [Oracle Cloudアダプタ接続とCSFキー・プロパティの構成](#)
 - [Aribaアダプタ呼出しの「操作」ページの構成](#)
 - [「サマリー」ページでの構成値のレビュー](#)

SOAコンポジット・アプリケーションの設計の完了

この項では、SOAコンポジット・アプリケーションの設計を完了し、アプリケーションをデプロイする方法の概要を説明します。

1. SOAコンポジット・アプリケーションの残りの内容を設計します。次に例を示します。
 - a) BPELプロセスをアダプタに接続します。この例では、BPELプロセスが外部参照としてアダプタに接続されます。
 - b) BPELプロセスの内容を設計します。次に例を示します。
 - a. BPELプロセスをダブルクリックします。
 - b. アダプタを呼び出す呼出しアクティビティを追加および構成します。

3-2 SOAコンポジット・アプリケーションの設計

- c. アダプタにメッセージを送信したときまたはアダプタからメッセージを受信したときに1つの変数の内容を別の変数にコピーする割当てアクティビティを追加および構成します。
- d. 必要に応じて、他のアクティビティを追加および構成します。

完了したら、SOAコンポジット・エディタにSOAコンポジット・アプリケーションを表示します。

SOAコンポジット・アプリケーションの作成および設計の詳細は、Oracle SOA SuiteでのSOAアプリケーションの開発を参照してください。

2. SOAコンポジット・アプリケーションをデプロイします。

- a) ナビゲータで、プロジェクトを右クリックし、「**デプロイ**」→<project_name>を選択します。
- b) デプロイメント・ウィザードの手順に従って、SOAコンポジット・アプリケーションをアプリケーション・サーバーにデプロイします。

Oracle Service Busビジネス・サービスの設計

この項では、Oracle JDeveloperでアダプタを含むOracle Service Busビジネス・サービスを設計する方法を説明します。

- [Oracle Service Busビジネス・サービスの作成](#)
- [ビジネス・サービスへの参照としてのアダプタの追加](#)
- [Oracle Service Busビジネス・サービスの設計の完了](#)

Oracle Service Busビジネス・サービスの作成

この項では、Oracle JDeveloperでアダプタを含むOracle Service Busビジネス・サービスを作成する方法の概要を説明します。

1. Oracle JDeveloperを起動します。
2. 「ファイル」メニューから、「新規」→「アプリケーション」を選択します。
3. 「新規ギャラリー」ダイアログで、「アイテム」リストから「**Service Busアプリケーション**」を選択し、「OK」をクリックします。
4. アプリケーション名を指定し、「次へ」をクリックします。
5. プロジェクト名を指定します。
6. 「**Service Bus**」を選択し、「終了」をクリックします。

Oracle Service Bus概要エディタで設計するOracle Service Busビジネス・サービスが表示されます。

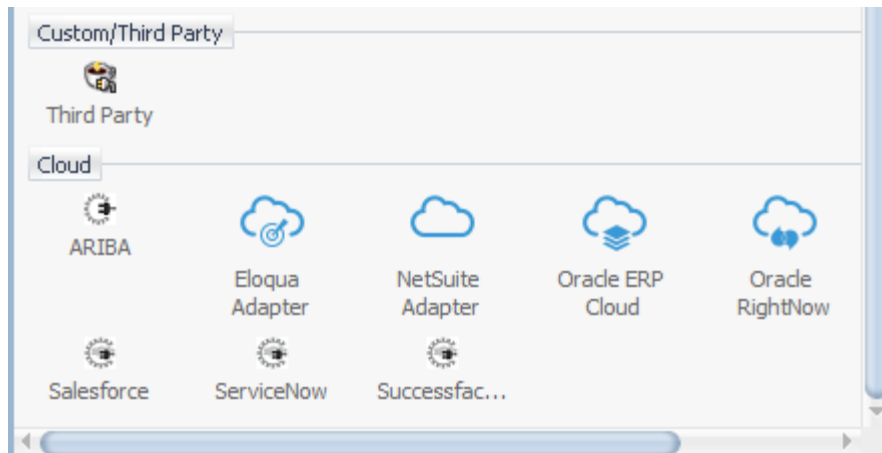
ビジネス・サービスへの参照としてのアダプタの追加

Oracle JDeveloperで「外部サービス」スイムレーンへのアウトバウンド(ターゲット)外部サービスとしてアダプタをOracle Service Busビジネス・サービスに追加できます。

ノート: アダプタの構成中にOSBリソースのインポート・ダイアログが表示された場合は、「取消」をクリックします。WSDLファイルはローカライズできません。

1. Oracle Service Busビジネス・サービスの「コンポーネント・パレット」に移動します。

2. 「カスタム/サード・パーティ」の「クラウド」セクションに移動します。



3. アウトバウンド(ターゲット)外部サービスを作成するには、アダプタを「外部サービス」スイムレーンにドラッグし、アダプタを構成するウィザード・ページについて説明している次の項を参照してください。
 - [基本情報プロパティの構成](#)
 - [Oracle Cloudアダプタ接続とCSFキー・プロパティの構成](#)
 - [Aribaアダプタ呼出しの操作プロパティの構成](#)
 - [「サマリー」ページでの構成値のレビュー](#)

Oracle Service Busビジネス・サービスの設計の完了

この項ではOracle Service Busビジネス・サービスの設計を完了し、アプリケーションをデプロイする方法の概要を説明します。

1. Oracle Service Busビジネス・サービスの内容を設計します。たとえば、ビジネス・サービスでOracle Service Busプロキシ・サービスを構成するには、次の手順を実行します。
 - a) Oracle Service Bus概要エディタで、**パイプライン/分割結合**レーンを右クリックし、「挿入」→「パイプライン」を選択します。
「パイプライン・サービスの作成」ダイアログが表示されます。
 - b) パイプラインの名前を入力し、プロジェクトの場所を選択して「次へ」をクリックします。
 - c) 「サービス・タイプ」として「WSDL」を選択します。
 - d) 「WSDL」選択項目の右側にある「参照」アイコンをクリックしてWSDLを選択します。
 - e) 「アプリケーション」を選択します。
 - f) 「リソース・チューザ」を展開してWSDLファイルを選択し、「OK」をクリックします。
 - g) 「プロキシ・サービスとして公開」が選択されていることを確認します。
 - h) 「プロキシ・トランスポート」リストから、「http」を選択し、「終了」をクリックします。

4-2 Oracle Service Busビジネス・サービスの設計

「パイプライン」コンポーネントがOracle Service Bus概要エディタに表示されます。

- i) 外部サービスを「パイプライン」コンポーネントに接続します。

Oracle Service Busビジネス・サービスの作成および設計の詳細は、『*Oracle Service Busでのサービスの開発*』を参照してください。

2. デフォルト・ルーティングを示すパイプラインを開きます。
3. サービスと対応する操作が、ダイアログの下部にあるルーティング・プロパティタブに表示されます。

アウトバウンド・プロジェクトはデプロイできる状態になります。

4. ビジネス・サービスをデプロイします。

ノート: Oracle JDeveloperを使用してビジネス・サービスをOracle SOA Cloud Serviceにデプロイすることはできません。その他のデプロイメント・オプションについては、Oracle SOA Cloud Serviceの使用を参照してください。

- a) プロジェクトを選択し、「**Service Bus**サーバーへのデプロイ」を選択します。
- b) デプロイメント・ウィザードの手順に従います。

Aribaアダプタのプロパティの構成

Aribaアダプタを使用すると、Ariba SaaSクラウド・アプリケーションとの統合を作成できます。

以降の項では、Aribaアダプタを統合の呼出しとして構成できるウィザード・ページについて説明します。Aribaアダプタは統合のトリガーとして構成できません。

この章は次のトピックで構成されています。

- [基本情報プロパティの構成](#)
- [Oracle Cloudアダプタ接続とCSFキー・プロパティの構成](#)
- [Aribaアダプタ呼出しの操作プロパティの構成](#)
- [「サマリー」ページでの構成値のレビュー](#)

基本情報プロパティの構成

統合の各ソースとターゲット・アダプタの「基本情報」ページで名前と説明を入力できます。

この項は次のトピックで構成されています。

- [「基本情報」ページで実行できる操作](#)
- [「基本情報」ページに表示される内容](#)

「基本情報」ページで実行できる操作

「基本情報」ページでは次の値を指定できます。「基本情報」ページは、アダプタでサポートされるトリガー(ソース)または呼出し(ターゲット)エリアにアダプタをドラッグすると常に表示されるウィザードの初期ページです。

- わかりやすい名前を指定します。
- 職責の説明を指定します。

「基本情報」ページに表示される内容

次の表で、「基本情報」ページに表示される主な情報について説明します。

要素	説明
エンドポイントにどのような名前を付けますか。	他のユーザーがこの接続の職責を理解できるようにわかりやすい名前を指定します。名前には英語のアルファベット文字、数字、アンダースコア、ダッシュを含めることができます。以下を含めることはできません。 - 空白(My Inbound Connectionなど) - 特殊文字(#;83&やrigh(t)now4など) - 全角文字
このエンドポイントでは何が行われますか。	接続の職責の説明をオプションで入力します。例: This connection receives an inbound request to synchronize account information with the cloud application.

Oracle Cloudアダプタ接続とCSFキー・プロパティの構成

統合のOracle Cloudアダプタ構成接続と資格証明ストア・フレームワーク(CSF)のキー値を入力します。

この項は次のトピックで構成されています。

- [Oracle Cloudアダプタの「接続」ページで実行できる操作](#)
- [Oracle Cloudアダプタの「接続」ページに表示される内容](#)
- [Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」ページで実行できる操作](#)
- [Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」ページに表示される内容](#)

Oracle Cloudアダプタの「接続」ページで実行できる操作

Oracle Cloudアダプタの次の接続値を指定できます。

- 一部のアダプタについてはWSDL URLを指定します。Aribaアダプタの場合は、「ホスト名」、「アプリケーション名」、および「パーティション名」を指定する必要があります。
- セキュリティ・ポリシーを指定します。
- 認証キーを作成します。1つの方向(アウトバウンドなど)に対して作成されたキーを他の方向(インバウンドなど)でも選択できます。

Oracle Cloudアダプタの「接続」ページに表示される内容

次の表で、Oracle Cloudアダプタの「接続」ページに表示される主な情報について説明します。

要素	説明
ホスト名	SAP Aribaサーバーのホスト名を入力します。 例: https://s1.ariba.com
アプリケーション名	「購買担当」を選択します。 ノート: 「サプライヤ」はサポートされていません。
パーティション名	「パーティション(サイト名)」フィールドに、操作を実行するSAP Aribaサーバーの名前を入力します。 例: *****/Procurement.s1.ariba.com
セキュリティ・ポリシー	環境に適したセキュリティ・ポリシーを選択します(例: USERNAME_PASSWORD_TOKEN)。 - ウィザードにはすべてのポリシーが表示され、該当しない可能性もあるポリシーも含まれます。正しい選択を行うには、ポリシーについて把握している必要があります。たとえば、SAML ベースのポリシーは選択できません。これはアイデンティティが伝播されないためです。 - クラウド・アダプタに適用するポリシーは、クラウド・アダプタに固有であり、コンポジットの他のエンドポイントには影響しません。
認証キー	CSF認証キーを選択します。 追加: 新しい認証キーを作成するには「追加」をクリックします。キー名、ユーザー名、およびパスワードを指定する必要があります。 編集: 認証キーを編集する場合にクリックします。 削除: 認証キーを削除する場合にクリックします。
テスト	認証キーを検証する場合にクリックします。

Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」ページで実行できる操作

Oracle Cloudアダプタの次のCSFキー値を指定できます。

- CSFキー名
- ユーザー名とパスワード
- パスワードの再入力

Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」ページに表示される内容

次の表で、Oracle Cloudアダプタの「CSFキー」ページに表示される主な情報について説明します。

要素	説明
CSFキー名	資格証明のランタイム注入を有効にするCSFキーを指定します。アダプタは、CSFを使用して、アプリケーション(Oracle Sales CloudやOracle ERPアプリケーション

	など)での認証に必要なユーザー名とパスワードを取得します。このキーは、デザインタイム中にログイン資格証明を識別します。
ユーザー名	アプリケーション(Oracle Sales Cloudやアプリケーションなど)での認証に必要なユーザー名とパスワードを取得します。管理者がユーザーに資格証明を付与します。
パスワード	アプリケーションに接続するためのパスワードを入力します。
パスワードの再入力	同じパスワードを2回入力します。

Aribaアダプタ呼出しの操作プロパティの構成

統合のAribaアダプタ呼出しの操作の値を入力します。

この項は次のトピックで構成されています。

- [Aribaアダプタ呼出しの「操作」ページで実行できる操作](#)
- [Aribaアダプタ呼出しの「操作」ページに表示される内容](#)

Aribaアダプタ呼出しの「操作」ページで実行できる操作

Aribaアダプタに対して次の呼出しの操作の値を構成できます。

- 実行する操作を選択します。
- 操作を実行するビジネス・オプションを選択します。

Aribaアダプタ呼出しの「操作」ページに表示される内容

次の表で、呼出しの「操作」ページに表示される主な情報について説明します。

要素	説明
次のステップをクリック	この機能は現在使用できません。
操作タイプの選択	• 契約ワークスペースのインポート – 契約ワークスペース情報を外部アプリケーションからSAP Aribaのアプリケーションにインポートします。 • サプライヤの作成 – サプライヤ情報を外部アプリケーションからSAP Aribaにインポートします。 • イベントの作成 – イベント情報を外部アプリケーションからSAP Aribaにインポートします。 • 外部承認要求の作成 – 外部の承認要求を外部アプリケーションからSAP Aribaにインポートします。

	• 送金の作成 – 各請求書に対してサプライヤに支払われた実際の金額を返します。送金情報をERPアプリケーションから直接SAP Aribaにインポートするときにこの操作を選択します。 • ソーシング・プロジェクトの作成 – ソーシング・プロジェクトを作成します。 • 組織の作成 – 組織を作成します。 • 外部契約情報の作成 – 外部アプリケーションから契約情報を返します。 • 調達単位の作成 – 調達単位情報を外部システムからSAP Aribaにインポートします。 • 購買依頼の作成 – 購買依頼情報を外部アプリケーションからSAP Aribaにインポートします。 • カタログ・アイテム検索 – SAP Aribaのカタログ・アイテムを検索して、SAP Aribaと外部アプリケーションの間の操作の同期を許可します。
オブジェクト名でフィルタリング	ビジネス・オブジェクトの表示をフィルタリングするために頭文字を入力します。

「サマリー」 ページでの構成値のレビュー

「サマリー」 ページで指定されたアダプタ構成値をレビューできます。

この項は次のトピックで構成されています。

- [「サマリー」 ページで実行できる操作](#)
- [「サマリー」 ページに表示される内容](#)

「サマリー」 ページで実行できる操作

「サマリー」ページでソースまたはターゲットの構成の詳細をレビューできます。「サマリー」ページは、各アダプタの構成が完了した後に表示されるウィザードの最終ページです。

- ソースまたはターゲットのアダプタに対して定義した構成の詳細を表示します。たとえば、リクエスト・ビジネス・オブジェクトと即時レスポンス・ビジネス・オブジェクトを含むインバウンドのソース・アダプタを定義した場合、この構成に関する固有の詳細が「サマリー」 ページに表示されます。
- 構成の詳細を保存する場合は、「完了」をクリックします。
- 特定のページにアクセスし構成の定義を更新するには、左側のパネルにある特定のタブをクリックするか、「戻る」をクリックします。
- 構成の詳細を取り消す場合は、「取消」をクリックします。

「サマリー」ページに表示される内容

次の表では、「サマリー」ページの主な情報について説明します。

要素	説明
サマリー	ウィザードの前のページで定義したソースまたはターゲットの構成値のサマリーを表示します。 生成されたXSDファイルが提供されるアダプタの場合は、XSDリンクをクリックして、ファイルの読取り専用バージョンを表示します。 前のページに戻って値を更新するには、左側のパネルにある該当のタブをクリックするか、「戻る」をクリックします。

アプリケーションの管理

Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware ControlまたはOracle Service Busコンソールからアダプタを使用するOracle SOA SuiteまたはOracle Service Busアプリケーションを管理および監視できます。

この章は次の項で構成されています。

- [Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlでのアプリケーションの管理](#)
- [Oracle Service BusコンソールからのOracle Service Busプロジェクトのテスト](#)

Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlでのアプリケーションの管理

Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlにアダプタを含めるSOAコンポジット・アプリケーションまたはOracle Service Busビジネス・サービスを監視できます。

1. Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlにログインします。
2. ナビゲータで、ツリーを展開してSOAコンポジット・アプリケーションまたはOracle Service Busビジネス・サービス・プロジェクト(この例では、SOAコンポジット・アプリケーションが選択されています)を表示します。
3. SOAコンポジット・アプリケーションを選択します。
4. 「テスト」をクリックします。
「Webサービスのテスト」ページが表示されます。
5. ページのフィールドに入力してコンポジットのテストを開始します。
6. 「Webサービスのテスト」をクリックします。起動の結果が表示されます。
7. 「フロー・トレースの起動」をクリックして、アダプタに関するフローの詳細を含む、SOAコンポジット・アプリケーションのフロー・トレースを表示します。
8. Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Controlでのアプリケーションの監視の詳細は、Oracle SOA SuiteおよびOracle Business Process Management Suiteの管理およびOracle Service Busの管理を参照してください。

Oracle Service BusコンソールからのOracle Service Busプロジェクトのテスト

Oracle Service BusコンソールからOracle Service Busビジネス・サービス・プロジェクトをテストできます。

1. Oracle Service Bus コンソールにログインします。
2. ナビゲータの「すべてのプロジェクト」で、テストするプロジェクトを開きます。
3. ナビゲータで、そのプロジェクトのビジネス・サービスをクリックします。
4. 「テスト・コンソールの起動」(緑の矢印ボタン)をクリックしてアウトバウンド・エンドポイントをテストします。これにより、テストするプロキシ・サービスと操作を表示するウィンドウが開きます。
5. 入力して、「実行」をクリックします。

これにより、ペイロードがOracle Cloudアプリケーションに送信されます。レスポンスは「レスポンス・ドキュメント」セクションに表示されます。

Oracle Service Bus ビジネス・サービス・プロジェクトのテストの詳細は、Oracle Service Bus の管理を参照してください。

7.

トラブルシューティング

次の表で、トラブルシューティング情報を説明します。

エラー	原因	解決策
javax.net.ssl.SSLHandshakeException: サーバーはTLSv1を選択したが、該当のプロトコル・バージョンが有効でないかクライアントでサポートされていない	AribaサーバーはTLSv1をサポートし、SOAはTLSv1よりも上のTLSバージョンでリクエストを終了している	"setStartupEnv.sh" ファイルで Weblogic.security.SSL.minimumProtocol Version=TLSv1"を更新する